

- 1 教育事業名 「いきいき自然体験キャンプ」
～自然からの贈り物 仲間からの贈り物～
- 2 ね ら い
 - ・標準生活時間での生活、3食の食事、体験活動をとおして1日をリズムよく生活することの大切さを実感する。
 - ・仲間との交流をとおして参加児童・生徒同士の心のふれあいを深め、心を開くきっかけとする。
 - ・新しい自分を発見し、自己肯定感・自己有用感をもつことができる。
- 3 期 日 平成26年9月16日(火)～19日(金) 3泊4日
- 4 場 所 国立沖縄青少年交流の家
- 5 募集定員 50名程度
- 6 参加人数 55名
- 7 参加者内訳 小学生2名・中学生27名・高校生3名・引率23名
(男性25名、女性30名)(県内55名)
- 8 講 師

鎌田 晴美氏 (ラナ・ポロサ・ポロサ)	チャレンジプログラム
鎌田 学氏 (ネイティブハート)	チャレンジプログラム
松本 大進氏 (臨床心理士)	カウンセリング
植前 和代氏 (心理カウンセラー)	カウンセリング
照屋 寛信氏 (手作り遊び工房ふぁーかんだー)	クラフト・野外活動
森 有紀子氏 (公認スノーケリング指導員)	スノーケリング
池松 来氏 (ダイビングインストラクター)	スノーケリング
工藤 剛氏 (ダイビングインストラクター)	スノーケリング

9 実施プログラム

	6:30	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
9/16 (火)			とまりん 集合 受付	泊港出港 フェリー	渡嘉敷港 着移動	屋食 (持参弁当)	オープニング 「安心できる環境づくり」 テント設営・ふれあいレク			火おこし	夕食(野外炊事)	ゆとりの 時間	ふりかえり	シャワー	就寝 (テント)	
9/17 (水)	起床 朝のリラックスタイム	朝食 (軽食)	「トカシクチャレンジ」～自然からの贈り物～海洋研修・ゲーム		屋食 (弁当)	「トカシクチャレンジ」～自然からの贈り物～海洋研修・ゲーム			シャワー	夕食(野外炊事)	ゆとりの 時間	ふりかえり	シャワー	就寝 (テント)		
9/18 (木)	起床 朝のリラックスタイム	朝食 (軽食) テント撤収	○ハナレチャレンジ ～自然からの贈り物～ 屋食(弁当)・フリータイム					本館へ 移動	ゆとりの時間	夕飯の つどい	夕食 (食堂)	星座観察	ふりかえり	入浴	就寝 (本館)	
9/19 (金)	起床 朝の散歩	朝食 (食堂) 清掃	ニシヤマチャレンジ ～仲間からの贈り物～		屋食(食堂)	ふりかえり	エンディング アンケート	移動	渡嘉敷港 出港フェリー	泊港着 解散						

10 事業の様子

【1日目】「安心出来る環境づくり」



ふれあいレク



4日間過ごす仲間とフィールドを知る

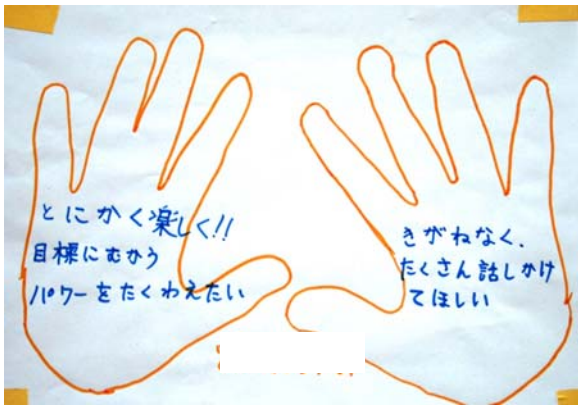


テントを立てよう！

【2日目】「自然からの贈り物」



エネルギーの元、火をおこす！



大切にしたい想いを共有しよう！



とかしくチャレンジ (スノーケリング)



自然のものでクラフト作り

【3日目】「自然と仲間からの贈り物」



チームでトライ！大縄跳び



ハナレチャレンジ：大型カヌーでハナレ島へ





ハナレ島（無人島）でフリータイム
【4日目】「仲間からの贈り物」



2014ハナレフォトコンテスト



ニシヤマチャレンジ



共に過ごした仲間と力を合わせて、課題にチャレンジ！

11 エピソード（参加者・引率者の声、アンケート・事後会議より）

【参加者の声】

- ・早起きできるということがわかった。
- ・少し体力がついた気がする。
- ・いろんな人と関わってよかった。人のためにもなれた。
- ・皆で協力したらなんでも成功することがわかった。
- ・自分から進んで仕事ができるようになった。
- ・人前で発表をするのが少しだけ得意になった。

【引率者の声】

- ・笑顔を絶やさずに日々積極的に集団での活動ができるようになっていく変化が見られた。
- ・子供達のエネルギーがどんどん増していったのが目に見えた。
- ・真剣に取り組んでいて、良い表情をしていた。
- ・「人と関わりあい」が子供達の欲するNO. 1であったことが収穫であった。
- ・キャンプ参加後、皆の輪から外れないように最初から活動に参加するようになった。

12 担当者所見

本事業は、非日常的な環境であり雄大な渡嘉敷島の海をいかした自然体験に「心の冒険教育」の手法をとり入れ、少しずつでも変化するきっかけとなってほしいと願いを込めて実施した。早起きや3度の食事等の基本的な生活リズムを整えるきっかけになったこと、「大丈夫と思ってやったら大丈夫だったから、やってみる」との体験から実感した発言があり、事業実施後の参加者には変化がみられたと報告を受けている。このことは、集団の力をいかした新しい自分の発見が、自己肯定感・自己有用感につながり成長するきっかけとなったと考える。今後は沖縄県適応指導教室連絡協議会との連携や双方の担当者間での情報交換をさらに深め、参加できない教室への配慮とアプローチの工夫をすることや、児童生徒の”一歩踏み出す“勇気を大切に、後押しできるよう引率指導者の意識改革を行いたい。